【活動報告】

精神分析的視点から捉える組織と個人

横浜国立大学教育相談・支援総合センター　田　村　和　子
横浜国立大学保健管理センター　杉　山　明　子
横浜国立大学教育学部　井　上　果　子

Report : Understanding of Institutional and Individual Dynamics in the light of Psychoanalytic Theory

【活動報告】

精神分析的視点から捉える組織と個人

Report : Understanding of Institutional and Individual Dynamics in the light of Psychoanalytic Theory

田村　和子*・杉山　明子**・井上　果子***

1．はじめに

昨年度に引き続き、保育園関係者のエンパワメントを目的とした研修会を企画実施した。経緯と研修会の内容、終了後の反響について報告する。

保育士，園に対して過度に攻撃的・依存的など、精神的に不安定な保護者との適切な関係性を維持するためには、行動の背景にある心理的特徴について理解することが役立つ。そこで、昨年度の研修会では、精神分析理論に基づき「心の機能」という観点から、関係性を維持することが難しい保護者の特徴を解説し、どのように対応したら良いのか、具体的な対応について紹介した。また、市内の保育園で実際に起こった事例を取り上げ、他の園でも生じうる様々な問題との共通事項を抽出し会場の理解を深めることを心がけた。研修会後のアンケートでは、内容についてポジティブな感想が寄せられるとともに、継続した研修の要望・組織運営への助言が求められた。

様々な社会要因により日々利用者のニーズや園児の特徴が多様性を増す中、公的サービス機関でもあり、園児の健全な発達を支援する専門施設でもある保育園は、社会資源として重要な役割を担っている。職員・スタッフもその期待に応えようと日々取り組まれているが、一方で、園児の発達促進以外の視点から助言を受ける機会や、園全体の組織としてのマネジメント方法を学ぶ機会は少ないように思われる。しかし実際は、園児との関わりや支援以上に、保護者あるいはスタッフ間の“大人同士の”人間関係を健全な形で維持し、職業モチベーションを維持できることが、業務遂行においては重要になってくる。組織責任者にとっては、「保育」を利用者に提供する視点に加え、職業組織を適宜管理運営していく視点が必要であろう。言い換えると、園児－保育士、保護者－利用者、職員－職員という一対の対人関係を基本単位として、それらが複雑に繋がり、やがて大きな網目を構成する組織を、有機的で健全な形で運営していく技術が求められることになる。第一回目の研修会終了後のアンケート結果は、現場で働く保育士の、危機感やモチベーションを正確に反映したものと言える。

組織管理には、園が置かれた環境（立地を含む）、その時在籍している園児や保護者、また職員の人数やそれぞれのパーソナリティなど、複数の要因を的確に把握し、対応することが求められる。そのため、組織管理に必要な技法や視点を、単なるマニュアルとして提供することは避けたい。また、そうした一義的なマニュアルは、結局は現場では通用しないとも思われる。継続・検証・改良可能な手法を身につけていただくこと、それを下地にして、多くの人々と知見を共有することが有用であり、そのために、理論体系をともに学ぶことを大事にしたいと考えた。そこで、プログラム構成については、第一回目と同様、前半で、精神分析的理論に基づいた個人と集団の理解について

*横浜国立大学教育相談・支援総合センター
**横浜国立大学保健管理センター
***横浜国立大学教育学部

講演を行った。精神分析的理論を軸に、実態を客観的に把握し、問題をある基準に照らして抽出することを重視する研修会となるように心がけた。理論に触れたあとは、参加者に身近な具体例と対応例を紹介し、理論体系と応用方法とを連結して学んでいただけるように工夫した。研修内容とその形式の２つから、問題解決に有用なヒントを得られると考えたからである。

さらに今回は、テーマに添った質問を事前に募集し、研修中に回答することとした。また、昨年同様、研修終了後には無記名のアンケートを実施した。これらの試みにより、研修会を提供する側と提供される側の感覚の乖離をできるだけ避け、会全体の質の向上を目指した。

２．活動内容

１）構成

開催日時：令和２(2020)年２月14日(金)
15：00-18：00

会場：横浜国立大学教育学部７号館３階310教室

参加者：横浜市内公立保育園園長・副園長・保育士23名　院生・学生４名　大学関係者６名(うち講師２名)　合計33名

広報・参加者募集方法：研修会開催のパンフレットを横浜市内保育所に配布。FAXまたはメールにて申込み受付後案内を送付。申し込み時に質問を募集した。

２）プログラム(所属)

１．主旨説明：田村和子(横浜国立大学　教育相談・支援総合センター)

２．講演：「ビオンの精神分析理論から捉えた個人や組織の力動」板橋登子(神奈川県立精神医療センター)　司会：杉山明子(横浜国立大学保健管理センター)

３．指定討論：「保育臨床場面における病理の理解」桜永昌徳(オフィスカルム)　司会：山田一子(慶応義塾大学)

４．質疑応答：「寄せられた質問への回答」

５．総評：井上果子(横浜国立大学　教育学部)

３）講演の内容

【講演】講演を担当された板橋先生は、精神分析理論に基づき、心の機能といった観点から組織をどのように見立てるか解説した。Bionの指摘(Bion, 1968)に基づき、集団を機能水準で２つに、機能不全の集団をさらに３つに分類し、各組織の特徴や付随して生じる問題と対応について紹介した。対応については、特に組織管理の観点から、管理責任者に必要とされるポイントについて解説を行った。(詳細については本号pp.13-33を参照。)講演担当者は、一般に難解とされるBionの集団に関する精神分析理論を細やかに噛み砕き説明された。身近な玩具や映画や小説・漫画を利用されたり、具体例を映像とともに提示されたため、非常にわかりやすい講演となったと思われる。

【指定討論】指定討論を担当された桜永先生は、組織の問題を「病理」というキーワードから理解し、問題の見立て方と対処方法を構築する方法を解説した。組織の問題を「病理」という視点で理解するためには、前半の【講演】で取り上げられた理論体系が必須である。基礎的な理論体系の説明について、同じ内容を異なる形で繰り返し提示されたことで、参加者の理解を促進することに貢献した。(詳細については本号pp.35-39を参照。)

【質疑応答】研修会参加者から寄せられた質問について、講演担当者の板橋先生が一つずつ回答をスライドにまとめ、丁寧に解説された。質疑応答までの時間に、講演･指定討論で話題となったトピックも含まれており、会場では肯いておられる参加者の姿が見られた。最後に会場から「保護者からのクレームへの謝罪」というテーマで質問がなされ、投影性同一視や罪悪感の取り扱いについて討議が行われた。(詳細については本号pp.41-49を参照。)「問題の解決を急がず葛藤に耐える重要性」について、参加者の多くがご自身の体験を思い起こし共感している様子であった。

【総評】研修内容及び活動内容の位置づけについて、講演・司会担当者の紹介を含みながら、総括がなされた。

３．今後の課題と展望

特定の保護者との関係性が焦点となった第一回目の研修会と異なり、今回は組織全体を運営するために必要な視点がテーマとなった。そのため、研修会開始当初は、用語や理論基盤の独特の複雑さが際立つ印象であった。しかし身近な例が解説に登場し、実例が上げられ、講演時間の経過とともに参加者の理解が促進されていった。

終了後に、感想と今後の希望を記載する無記名のアンケートを実施した。会全体への満足度については、参加者全員(23名)が「非常に満足」「満足」と回答した。研修内容の有用性や参考度については、「非常に満足」と回答した者の割合が前回よりやや少なかった(73～78%)。参加された先生方には、全体的に満足していただけたと推測されるが、研修会で取り扱った内容が前回よりも抽象度の高いテーマであったことが影響したと推測される。

自由記述からは、参加者各自が研修会から得たものが記載されていた。理論編である「講演」からは「α要素とβ要素」「K連結」「基底的想定」など、応用編である「質疑応答」からは「意見を出し合える環境作り」「謝らないことに罪悪感をもたない」「暗黙知から形式知」などである。参加者は、それぞれの課題やそれを解決するヒントとして研修内で紹介した単語をメモし、里程標のように使っておられた。理論編で基礎知識を身につけ、討論編で応用しながら理解を進められた様子が窺われる。なお質問編では「理解が追いつかず、また見直したいので資料が手元にほしい」という要望が複数記載されていた。

全体を通して「あの時のあのエピソードを思い出す」という感想は前回より少なく、「○○については理解できなかった」「わかっていないと思う」という“分からなさ”が明確に記載されていたことも特徴の一つである。取り扱ったテーマが、個々の人間関係から生じる問題ではなく、集団や組織運営に焦点を当てたものだったため、理論体系もやや複雑で難解に感じられたのかもしれない。また個々の概念への理解が深まり、様々な事象が以前より明瞭に把握できるようになった変化が、明確な“わからなさ”を生み出したのかもしれない。いずれにせよ、理論体系と応用方法については、より時間をかけ、何度も伝えていく必要があると思われる。

なお研修会終了後日、アンケート回答の要望に沿う形で、質問事項とその回答を再構築しわかりやすくまとめた資料を作成し、参加者へ配布した。

本活動により、精神分析的視点に基づく理解は、保育士が個々の利用者との間で感じる関わり方について理解の一助となるだけでなく、組織全体を健全に運営する際に大いに役立つことが示された。多くの組織管理担当者が精神分理論に基づく発達理論を土台とした知見を携え、それを組織マネジメントに利用することで、対人関係・組織理解を進め、問題を共有することが可能となるだろう。

前回に引き続き今回も、参加者からのニーズとして、継続的な研修会の提供・参加対象者の拡大・取り扱うテーマの多様化が確認できた。しかしな

がら2020年春から、世界規模でのパンデミックとそれに伴う生活様式の変更を余儀なくされ、勉強会や講演会の開催機会が奪われてしまった。こうした事態が一刻も早く沈静化することを願い、危険性を伴う職業に従事されている方に有用な情報を提供できるよう、これからも活動を継続し、地域との連携を深めていきたいと考える。

4．最後に

本活動は、平成31（令和元）年度横浜国立大学地域連携推進機構との協賛により開催された。また，企画実施において，精神分析武田こころの健康財団から助成を受けている。活動に際し頂いた関係者各位による様々なご支援に深謝する。

5．引用・参考文献

Bion, W. R (1961) Experiences in Groups and Other Papers. London: Tavistock Publications.（ビオン,W.R.　池田数好（訳）(1973)．集団精神療法の基礎（現代精神分析双書17）　岩崎学術出版社）